

「にほふ」の語源と万葉集3791番歌の 「丹穂之為」の訓釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

On the Original Meaning of the Word “Nihohu” and an Interpretation of the 31th Phrase of the 3791th Poem in Manyō-shū

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

上代語「にほふ（匂ふ）」の語源についてはすでいくつかの説があるが、本論文では新たに次のような説を提案する。辞書などに記載されている「にほふ」の主な意味は「赤く色づく、美しい色彩に輝く、香る」などであるが、これらはあくまでも派生した意味にすぎず、その語源はおそらく「におふ（荷負ふ）」であろう。すなわち、「にほふ」という語の原形は「におふ（荷負ふ）」であり、転じて抽象的な「匂い」や「色」や「香り」などを「背負う（帯びる）」という意味で用いられるようになったものと思われる。本論文では具体的な根拠に基づいてこの語源説を論証する。また、万葉集3791番歌の第31番目の句「丹穂之為」の訓釈についても検討する。

1. はじめに

「にほふ（匂ふ）」の語源は従来どのように考えられてきたのだろうか、まずこの点について調べることから始めよう。「日本語源大辞典」は「におう [にほふ]」（匂う）の語源説として以下の9つを挙げている（〈…〉は出典）（[1]、p. 859）。いずれの説もそれほど説得力があるようには思えない。

- (1) ニホ（丹穂）を活用したもので、ニは赤の意、ホはぬきんでて現れている意〈大言海・日本語の年輪＝大野晋〉。ニホ（丹秀）で色沢の意〈日本古語大辞典＝松岡静雄・日本語源＝賀茂百樹〉。
- (2) ニホヒは、ニハヒ（丹相・丹施）の義〈雅言考・名言通〉。
- (3) 丹延の義〈日本語源＝賀茂百樹〉。
- (4) ニヒウルホフ（新潤）の義〈日本語源学＝林甕臣〉。
- (5) キホフ（気放）の義。また、ヒウルホヘ（光沢）の転〈言元梯〉。
- (6) ニホは生の義。ニは身に付く意、ホは余るの意〈国語本義〉。
- (7) ヲニオウ（鬼追）の義。香をたいて疫鬼を追うところから〈和句解〉。
- (8) 赤い色から〈仙覚抄（せんがくしょう）〉。

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

(9) ニはニコヤカ (和) の義、ホヒはヲフ (生) の義 (日本釈名)。

一方、「時代別国語大辞典」は「にほふ」について次のように説明している ([2], p. 550)。「にほふ」には四段活用型 (自動詞) と下二段活用型 (他動詞) があるが、以下では前者に関する記述だけを示し、用例はすべて省略した。また注目箇所には下線を付けた。

- ① 赤く色づく。(a)花が美しい色に咲き、葉がもみじする。(b)他のもの (土・花など) の色が映り染まる。
- ② 美しい色彩に輝く。美しくつややかである。
- ③ かおる。芳香がする。

【考】ニホフの仮名書き例の多くが「丹穂」の字を使っているところを見ると、語源は別としても、丹の意を感じて使われていたのであろう。白梅・白つつじ、さらには藤・榛^{はり}についてもニホフという例があるところを見ると、多少「赤」の系列より逸脱した色についてもニホフということもあつたらしい。本来色彩に関する語であつたろうが、さらに、「香」「薫」のような香りに関する文字も使われており (万三二八・万四四三・万九七一)、これらは名義抄でもニホフ・カホルなどと訓まれていて、芳香についてのニホフもあつたと考えねばならないのではないか。橘やつつじの花に関してニホフといった万葉の四四三・九七一・四一六九なども、あるいは色ではなくて香についてなのかもしれない。②は、人の容貌、ひいては一般的に美しいものの表現として比喩的に使われたもの。(にほひ) 一始む・一ひづつ、(にほふ) 咲き一 →次項・にほはす・にほゆ

この説明では「にほふ」について「語源は別としても、丹の意を感じて使われていたのであろう」とあるが、これには次のような反例がある。丸カッコ内は原文である (以下もすべて同様)。

07/1192 白たへに (白栲尔) にほふ真土の (丹保布信土之) 山川に...

16/3801 岸野の榛^{はり}に にほふれど (丹穂所経迹) にほはぬ我れや (丹穂葉寐我八)...

ここでは白色や黒色 (榛の色) の「にほふ」に対しても「丹」の字が用いられており、「にほふ」の語源を (単に赤色の用例が多いという理由だけで) 「丹の色 = 赤い色」と結びつけるのは適当でない。ちなみに、先の説明では「多少「赤」の系列より逸脱した色についてもニホフということもあつたらしい」と述べているが、白色や黒色と赤色との違いは決して「多少」の違いではない。以上のことを考慮すると、「時代別国語大辞典」の説明では「にほふ」の基本的な意味として①、②、③の三つをあげているが、「にほふ」は白色や黒色に対しても用いられていることから、赤色の用例が多いのは単に我々の日常的な身の回りで「色鮮やかさが目立つ」のは赤色の場合が多いというだけの理由であり、①は②の特別な場合と見なし、「にほふ」の基本的な意味としては②の (色の種類によらず) 「美しい色彩に輝く」と③の「芳香がする」の二つに分類すべきであろう。

このように、「にほふ」の基本的な意味が色の種類に関係ないとすれば、「にほふ」の語源をどのように考えたらよいただろうか。

2. 「にほふ」の語源

「にほふ」の語源の手がかりの一つは、すでに本論文の姉妹編 [3] で議論したように、「にほ鳥」や

「にほの浦」の「にほ」の表記に「におふ=荷負ふ」をイメージさせる「牛留」あるいは「留牛馬」のような表記が用いられていることである。「にほふ」と「におふ」は音がきわめて近いから、この二つの語はもともと同一言葉だった可能性がある。例えば、443番歌に「つつじ花 にほへる君が(香君之) にほ鳥の(牛留鳥) なづさひ来むと」という表現があるが、ここの「にほへる君」と「にほ鳥」の関係は単に「同音」の反復というだけでなく、「語源的」にも密接に関係していることを示唆している。というのは、「荷負ふ」という語のもつイメージを抽象化して「色や香りなどの特別な性質を背負う(帯びる)」と解すると「匂ふ」という語のもつイメージと完全に重なるからである。これは「にほふ=匂ふ」の語源を「におふ=荷負ふ」と考えることにほかならない。以下、この推測の妥当性について検討してみよう。

なお、「にほふ」と「におふ」の二つの語を比較した場合、「荷を背負う」という具体的な意味をもつ「におふ」の方が原形であり、「にほふ」はこれから抽象的に派生した語で「目立つ雰囲気(色彩や香など)を回りに背負っている(漂わせている)」という意味で用いられるようになったと考えられる。このように考えれば、「にほふ」という語が前節の②「美しい色彩に輝く」や③「芳香がする」の意味で用いられていることともつじつまが合う。以下、この語源説を裏付ける根拠を三つ示そう。

まず第一の根拠は次の歌の存在である。

01/0057 引馬野に(引馬野)にほふ榛原(仁保布榛原)入り乱れ 衣にほはせ 旅のしるしに

ここで注目したいのは、発句の「引馬」と第二句の「にほふ」の関係である。「引馬」は表向きは単なる地名であるが、原文に「引馬」と表記されている以上、この歌の読み手は、この表記から「馬の背中に荷物をのせて人が引いて行く『引く馬』」をイメージするはずであり、結果として「引馬」→「荷負ふ」→「におふ」という連想をするだろう。同時にまた、第二句の「にほふ」から類音(および語源的共通性)によって「におふ=荷負ふ」を感じ取り、結果として発句の「引馬」が「におふ=荷負ふ」という連想を介して第二句の「にほふ=匂ふ」へと自然につながり、ここに歌の読み手は発句と第二句の必然的な関係を認めるであろう。この歌の「おもしろさ」はここにあり、榛原はどこにでもあるのになぜ「引馬野」という地名の榛原なのかという疑問も氷解する。似たような「おもしろさ」は、443番歌で「にほ鳥」を「牛留鳥」と表記し、2743番歌の異伝歌で「にほの浦」を「留牛馬浦」と表記しているところにも見られる。

第二の根拠は、次の三つの歌の存在である。特に下線部の表記に注目されたい。

10/2115 手に取れば 袖さへにほふ(袖并丹覆)をみなへし …

13/3309 … つつじ花 にほえ娘子(尔太遥越壳)桜花 栄え娘子…

19/4211 … 春花の にほえ栄えて(尔太要盛而)秋の葉の にほひに照れる …

ほとんどの注釈書は「丹覆」を「にほふ」と訓み、「尔太遥」と「尔太要」を「にほえ」と訓んでいる。この訓み方は、結果的には正しいが、少し検討を要する。それは「覆」と「太」の用例を調べてみると明らかとなる。まず「覆」の訓み方の用例を示す(全部で13例、2115番歌は除く)。

「おほふ」(覆う)	10件
「かへる」(ひっくり返る)	2件
「くもり」(曇り)	1件

この結果から「覆」を「ほふ」と訓んだ例はないことがわかる。次に「太」の訓み方について調べた結果を示す（全部で211例、3309番歌と4211番歌は除く）。

「だ」（少数の「た」を含む）	196件
「て」	2件
「ふとし（太し）」	8件
「おほし（多し）」	3件
「いたし」	2件

「太」を「ほ」と訓んだ例もないことがわかる。以上の結果から、もし「丹覆」を「にほふ」と訓み、「尔太」を「にほ」と例のない訓み方をするのであれば、その理由を説明しなければならない。澤瀉久孝氏は「太」を「ほ」と訓む理由として、古事記と日本書紀における継体天皇の諱の表記例を引いて次のように述べている（[4]、p. 178）。

「太」はオホのオを略した訓仮名である。古事記に「袁本杼命」とあるを、継体紀に「男大迹天皇」とあると同じである。

ここでは同一人物（継体天皇）に対する人名の一部が古事記では「袁本（をほ）」、日本書紀では「男大」となっていることを根拠にして「太」を「ほ」の訓仮名だと主張している。しかしこの例は、「男大」の本来の訓みが「をおほ」だったことを示唆するもので、ただ実際の発音では語中の母音「お」が脱落し、結果として「をおほ」が「をほ」に縮約されて発音されたと見るべきではなかろうか。

このことを裏付ける証拠がいくつかある。万葉集1685番歌に「玉藻かも 散り乱れたる（散乱而在）川の常かも」とあるが、ここでは「たる」が「而存」と表記されている。しかしこの表記を理由に、「た」の仮名が「而」、「る」の仮名が「在」と主張する人はいないだろう。「たる」が意図的に「而在」と表記されているのは「たる」の原形（語源）が「てある」だったことを示唆しているのであり、実際にはこれが縮約して「たる」と発音されたにすぎない。ちなみに、助動詞の「たる」を「而在」と表記した例はほかにも2509番歌があり、また「たる」を「而有」と表記した例が2318、2789、2829、3800番歌などにある。これらの例を考慮すれば、先の「丹覆」や「尔太」などの表記もこれと同じで、縮約される前の発音の「におほふ」や「におほ」に基づいて表記されたものと思われる。

似たような例はほかにもある。例えば万葉集に「遠音」と表記して「とほと」と訓ませたり、「川音」と表記して「かはと」と訓ませたりする例がある。万葉集には多数の「音」の用例があるが（123件）、「音」を「と」と訓むのは「遠音」（とほと）が2件、「川音」（かわと）、「瀬之音」（せのと）、「楫音」（かぢのと）がそれぞれ1件ずつ計5件に限られている。いずれも複合語の前後の音のつながりから「おと」の「お」が脱落したものである。したがって「遠音」の本来の訓みあくまでも「とほおと」（遠くの音）であり、これが縮約して「とほと」と発音されるようになったものである。同様に「川音」も「かはおと」が縮約して「かはと」となったものである。すなわち「遠音」を「とほと」と訓むからといって「音」の訓仮名が「と」であるということにはならない。

こうした例を参考にすると、先にあげた三つの例（2115、3309、4221番歌）について次のような結論が得られる。まず2115番歌において「にほふ」が「丹覆」と表記されているという事実は、「にほふ」の本来形が「におほふ」であり、これが「にほふ」に縮約したことを示唆している。というのは、もし「覆」

を単に「ほふ」と訓ませたいのであれば、わざわざ用例のない「覆」の字を用いる必要はなく、ほかに多数用例のある表記（「穂経」や「保布」など）を用いればよいはずだからである。意識的に「覆」という字を用いているのは「にほふ」の本来形が「におほふ」だからに違いない。そして、もし「にほふ」の本来形が「におほふ」であるならば、「にほふ」の語源は「におふ＝荷負ふ」である可能性がある。「におほふ」と「におふ」はきわめて近い音だからである。

また先にあげた3309番歌と4211番歌の例において、「にほゆ」の連用形「にほえ」が「尔太遥」や「尔太要」と表記されているという事実は、「にほゆ」の本来形が「におほゆ」であり、これが「にほゆ」に縮約したことを示唆している。なぜならば、もし「にほゆ」という語が初めから「にほゆ」であったならば、「にほ」の表記としてわざわざ「におほ」を思わせる「尔太」という特別な表記を用いる必要はなく、多くの用例がある一般的な表記「尔保」や「尔穂」などを用いればよいはずだからである。わざわざ「尔太」と表記しているからには、本来形（あるいは「ゆっくりと」発音した時の形）が「におほ」であることを意図的に伝えようとしているように思われる。ちなみに「にほゆ」という動詞は「にほふ」と同じ意味で「おそらく古い形であろう」とされている（[2]、p. 550）。

さて次に、「にほふ」の語源が「におふ」であることを裏付ける第三の根拠を示そう。もし「にほふ」の語源が「に（荷）+おふ（負ふ）」であるならば、「～ほふ」という語形をもつ動詞の語尾「ほふ」が「～を負ふ」という意味をもつ例が「にほふ」のほかにも存在することが予想される。そこで「時代別国語大辞典」の中から「～ほふ」の形をもつ語をすべて抽出してみた。結果は次の8語である。ただし基本語だけを取り上げ、例えば「さわききほふ」は「さわく（騒く）」と「きほふ（競ふ）」の合成語であるから、「きほふ」は取り上げるが「さわききほふ」は取り上げない。

- | | |
|------------|--------------|
| ① うるほふ（潤ふ） | ② おほふ（覆ふ） |
| ③ きほふ（競ふ） | ④ よろほふ |
| ⑤ しらとほふ | ⑥ のろひとほふ（呪誼） |
| ⑦ にぎほふ | ⑧ よそほふ（装ふ） |

まず①の「うるほふ」から考えよう。「うるほふ」は「潤った状態になる」の意であるが、語源は「うるひ（潤）+おふ（負ふ）＝潤った状態を背負う」で、「うるひおふ」が「うるほふ」に縮約したと考えられる。すなわち、「おふ（負ふ）」という語は本来は「荷」を「背負う」のが原義であるが、ここでは転じて抽象的な「うるひ（潤）」という状態を「背負う」ことに用いられたと考えられる。

②の「おほふ」は「おほ（大）+おふ（負ふ）＝大きく背負う」が語源で、転じて「あるものを全体的にすっぽりと覆い隠す」の意味で用いられるようになり、「おほおふ」が「おほふ」に縮約したと考えられる。ちなみに「覆う」を意味する上代語は「おほふ」のほかに「おふ」がある（[2]、pp. 160-161、p. 155）。「おふ」は用例が少なく万葉集には例がない。「おふ」は「おほふ」がさらに縮約したものと思われる。これに似た例として、例えば仁賢天皇の名として古事記に「意祁（おけ）王」と「意富祁（おほけ）王」の二つの表記がある（[5]、p. 361、p. 369）。これは上に示した「おふ」と「おほふ」の関係と同じである。

③の「きほふ」は「き（気）+おふ（負ふ）＝気を背負う」が語源で、相手と何かを「競う」とときには「気を張り詰めて構える」ことから、「気負ふ」が転じて「競う」の意味で用いられるようになり、「きおふ」が「きほふ」に音変化したと考えられる。この音変化は「におふ＝荷負ふ」が「にほふ＝匂ふ」に音変化したのとまったく同じである。

④の「よろほふ」は「あっちへより、こっちへよりして、寄り道しながらすすむ」の意であるが（〔2〕、p. 807）、「よろ」という語は現代語でも「よろよろと歩く」や「よろめく」などの語として使われているように「足取りが確かでなくよろめく様子」を表す擬態語だと思われる。したがって「よろほふ」は「よろ+おふ（負ふ）=よろよろした状態を背負う」が語源で、転じて「よろよろした状態をとる」という意味で用いられるようになり、「よろおふ」が「よろほふ」に音変化したと考えられる。

⑤の「しらとほふ」は枕詞で地名のヲニヒタ小新田・ニヒバリ新治に掛かるとされるが、語義およびかかり方は未詳となっている（〔2〕、p. 372）。したがって、語源については今のところ考えようがない。

⑥の「のろひとほふ」は「のろひ（呪）」と「呪詛する」を意味する「とこふ」の複合語「のろひ+とこふ」が「のろひとほふ」に音変化したものであり（〔2〕、p. 491）、本来の語形で見ると今問題にしている「～ほふ」の語形ではないから、ここの議論から除外してよい。

⑦の「にぎほふ」は「豊かにする」という意味の他動詞であるが、これの自動詞形として「にぎはふ」がある。また鎌倉時代の「愚管抄」には「猿楽狂ひ者などにぎにぎと召し使ひて」のように「にぎにぎ」（賑賑）という語が見られる（〔6〕、p. 1005）。したがって「にぎ」は「豊かな様子」を表すある種の擬態語だと考えられ、「にぎ+おふ（負ふ）=豊かな様子を背負う」が転じて「豊かにする」という意味で用いられるようになり、「にぎおふ」が「にぎほふ」に音変化したと考えられる。

⑧の「よそほふ」は「身づくろいする」という意味の語であるが、同じ意味の「よそふ」（装ふ）という語もある。「時代別国語大辞典」は「よそほひ」という見出し語の説明で「ヨソフ（四段）に動詞語尾フが接してできた動詞（四段）の名詞形」としているが、「よそほふ」が果たして「よそふ」に「ふ」を接してできた語かどうかは疑問である。というのは、「よそふ」という語はそれ自体で「身づくろいする」という他動詞であるが、それにさらに他動詞化語尾「ふ」を付けて同じ意味の語を作る必要がないからである。むしろ「よそほふ」の方が本来形であり、これが縮約によって「よそふ」という語になったのではなかろうか。「よそほふ」の語源は「よそ（外）+おふ（負ふ）=ある状態（飾りや香りなど）を外側に背負う」であり、転じて「人や船などの外見を飾る」という意味で用いられるようになり、「よそおふ」が「よそほふ」に音変化したと考えられる。

以上検討してきたように、「～ほふ」という語形をもつ上代語は「しらとほふ」という語義未詳の語を除けばすべて「～の状態を背負う」という意味に解して特に無理な点はないことがわかった。このことは「にほふ（匂ふ）」の語源が「におふ（荷負ふ）」であることを強く示唆している。

3. 万葉集3791番歌の「丹穂之為」の訓釈

この節では、前節の「にほふ」の語源問題と直接関係するわけではないが、「にほふ」という語に関連して従来行われてきた万葉集3791番歌の「丹穂之為」の訓釈について再検討してみたい。まず歌の本文（一部分のみ）と主な先行研究（関連部分のみ）を以下に掲載する。

16/3791 … 紫の 大綾の衣 住吉の 遠里小野の ま榛もち にほ之為衣に（丹穂之為衣丹）
高麗錦 紐に縫ひ付け…

① 新日本古典文学大系^[7]

底本原文「丹穂之為」を「丹穂々為」と原文改定して「にほほし」と訓み、「染め上げた（衣に）」と現代語訳し、脚注で次のように述べている。「にほほし衣」は、尼崎本・広瀬本の「丹穂々為衣」に拠る。「にほほし衣」の転か。

② 新編日本古典文学全集^[8]

底本原文「丹穂之為」を「丹穂々為」と原文改定して「にほほす」と訓み、「渋く染め上げた（衣に）」と現代語訳し、頭注で「ニホハス（三六七七）と同じか」と述べている。

③ 講談社文庫（中西進）^[9]

底本原文「丹穂之為」のまま「にほしし」と訓み、「美しく彩った（衣に）」と現代語訳している。

④ 万葉集註釈（澤瀉久孝）^[10]

底本原文「丹穂之為」を「丹穂々為」と原文改定して「にほほし」と訓み、「色づけた（着物に）」と現代語訳した上で、次のような注釈を記している。（前略）そのニホホシはニホハシが先行母音の同化によつたものと見る事が出来る。ただそのニホホシが上の「真榛もち」をうける動詞性を失つて「にほほし衣」と複合名詞の一構成要素となつてゐるところに無理が感ぜられるが、これは韻文にありがちな圧縮された表現で、ニホホシの部分が動詞であると同時に名詞の一部をなす広義の掛詞と解すれば、本質的な支障にはならないと考へられる。（以下略）

⑤ 日本古典文学大系^[11]

底本原文「丹穂之為」のまま「にほしし」と訓み、「染めた（着物などに）」と現代語訳し、頭注で「にほしし衣はハリで染めた衣。ニホシはニホフの使役形。色に染めた意」と述べている。

上の五つの先行研究の結論として、「丹穂之為」はその訓みはともかく、意味としては「美しく染め上げた」あるいは「色づけた」ですべて一致していることがわかる。訓みについては、「にほほし」、「にほほす」、「にほしし」の三つがあるが、いずれも万葉集に例のない訓み方であり、いまだ定訓とは言えないようである。

ところが、もし「丹穂之為」を「にほのす」と訓み、これが「にほひ（匂ひ）+のす（載す）=にほひのす」の縮約形だと解するならば、「丹穂之為」の訓みと解釈の問題を同時に解決することができる。というのは、もしこのように訓むならば、「にほのす」の語源は「匂いを載せる=匂いを染み込ませる」という意味に解することができ、3791番歌の「ま榛もち にほのす衣に」は「真榛でもって匂い（色）を染み込ませた衣に」という意味になり、文脈にピッタリ合うからである。ちなみに、「にほのす衣に」の「のす」は他動詞の下二段動詞「のす=載す」（乗せる）の連体形である。また、「丹穂之為」の「之為」が「のす」と訓めることは次の歌から明らかである。

11/2786 山吹の にほへる妹が はねず色の 赤裳の姿（赤裳之為形） 夢に見えつつ

ここでは「赤裳のすがた」の「のす」が原文で「之為」と表記されている。また助詞の「の=之」は乙類であり、「のす=載す」の「の」も乙類であるから上代特殊仮名遣の観点からもつじつまが合う。

4. おわりに

本論文では、まず「にほふ=匂ふ」という語の語源について考察し、それが「におふ=荷負ふ」であることを提案した。「にほふ」の原形は「におふ」であり、牛や馬などが「荷を背負う」イメージから「目立つ雰囲気（色彩や香など）を回りに背負っている（漂わせている）」という抽象的な意味が派生したの

であろう。新しい言葉が作られる際には、具体的な物や動作を表す語が「比喩」のはたらきによって抽象的な意味を派生させていくことは多くの言語に共通しており、この観点からも「にほふ」という抽象的な語が「におふ」という具体的な語から派生したと考えるのは自然な考え方であろう。

本論文の考え方をさらに推し進めると、「にほ鳥」という鳥名の起源も「色鮮やかな鳥」を意味する「にほひ（匂ひ）+とり（鳥）」が縮約して「にほどり」になったのではないかという考えに自然と導かれる。しかし「にほ鳥」は通説では「カイツブリ」とされており、インターネット等の写真で見る限りこの鳥は決して「色鮮やかな鳥」とは言えない。水鳥の中にはマガモやオシドリなどカイツブリよりも色鮮やかな水鳥がいるのに、なぜこうした水鳥をさし置いてそれほど目立たない色のカイツブリが「匂ひ鳥」と命名されたのだろうか。もしかしたら通説の「にほ鳥=カイツブリ」説は正しくないのかも知れない。「にほ鳥」という鳥名の由来とこの鳥が今日のどの鳥に相当するかについては今後の検討課題として残しておきたい。

本論文のもう一つの課題として、万葉集3791番歌の第31番目の句「丹穂之為」の訓釈について再検討し、結論として「にほのす」と訓み、「にほひ（匂ひ）+のす（載す）」の縮約形で「匂いを載せる=匂いを染み込ませる」の意であることを提案した。以上のような提案が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「日本語源大辞典」、監修・前田富祺、小学館、p. 859、2005年。
- [2] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、p. 360、1967年。
- [3] 竹生政資・西晃央、万葉集443番歌の「牛留鳥」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第15集第1号、pp. 33-48、2010年。
- [4] 「萬葉集注釋 卷第十三」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 177-178、1964年。
- [5] 「古事記」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 361、p. 369、1997年。
- [6] 「岩波古語辞典 補訂版」、岩波書店、1990年。
- [7] 「萬葉集 四」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 14-20、2003年。
- [8] 「萬葉集④」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 92-97、1996年。
- [9] 「万葉集 原文付全訳注（四）」、中西進、講談社文庫、pp. 19-23、1983年。
- [10] 「萬葉集注釋 卷第十六」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 16-62、1966年。
- [11] 「萬葉集 四」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 120-125、1962年。